

雪室の変遷と特色に関する考察

— サイノカミ行事の雪室を中心として —

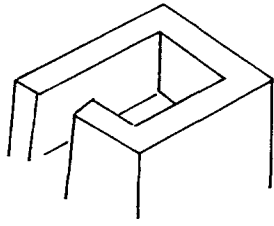
後 藤 麻衣子

一、はじめに

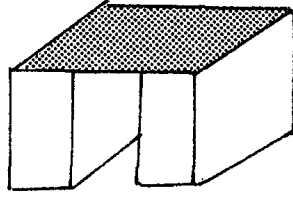
二月十五、十六日になると、秋田県横手市で水神祭が開催され、カマクラ⁽¹⁾と称される雪室を作製する。カマクラは大きなドーム型の雪室⁽²⁾である。当日、中では子供が餅を焼き、通行人に向かつて「あがつてたんせえ」と呼びかけ、参拝者に餅や甘酒を振舞う。ブルーノ・タウトはその様子を『日本美の再発見⁽³⁾』に記した。ブルーノ・タウトがカマクラを紹介したことにより、日本全国にカマクラが知れわたるようになった。その後、テレビや新聞などによって秋田県横手市で作られるカマクラが各地域に伝播していった。現在では冬季の子供の遊び場となっており、または雪祭りの雪造物の一つとして作製されている⁽⁴⁾。さらに冬季の観光資源として町中にカマクラを作って旅行者を楽しませ⁽⁵⁾、雪

の降らない地域の人々のためにミニカマクラの販売⁽⁶⁾も行っている。このように、カマクラは冬の風物詩として知らない人がいないくらい有名である。

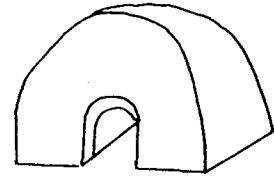
従来の雪室研究は奈良環之助⁽⁷⁾や佐川良視⁽⁸⁾などに見られるように、カマクラの語源研究が中心とされてきた。一方、横手のカマクラが伝播される以前の各地域の雪室研究に関しては、あまり行われてこなかった⁽⁹⁾。伝播以前の雪室は鳥追い行事やサイノカミ行事などの小正月行事の中で作られたり、狩猟の時の泊まり小屋や隠れ小屋として雪室が使用されたり、さらに冬季の子供の遊び場などに利用された。その利用方法や目的、外形、名称に至るまで、横手のカマクラとはかなり異なっていた。雪室はその地域の生業や自然環境などの影響を受け、地域的な特性を持つとともに、社会の変化によって変化してきた。雪室の地域性や変遷を



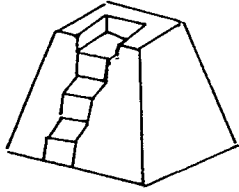
① 雪城型



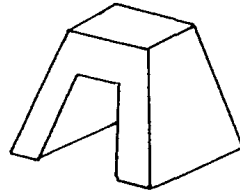
② 小屋型



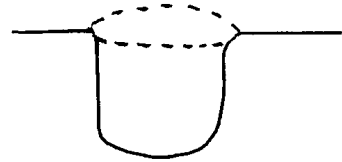
③ 雪穴型



④ 櫓型



⑤ 櫓型
(中に入れるもの)



⑥ 樽型

図1 雪室の形

〔出典〕 稲雄次『カマクラとボンデン』 秋田文化出版社 1990、及び現地での聞き取り調査などにより作成

辿り、その要因を解明することは、雪国の文化と環境との関連を明確にする上でも重要であり、そこに雪室研究の意義がある。

鳥追い行事や雪中田植えなどの小正月行事が消滅しつつある中、サイノカミ（サエノカミ）行事は現在でも行われている地域が多い。または一時廃れたが、復活する地域もかなりある。サイノカミ行事とは正月飾りを各戸から貰い集めて一定の場所に積み上げて焼く行事をいう¹⁰。サイノカミ行事は現在でも行われており、さらに大正末期から昭和初期までの状況を聞き取ることが可能であり、その変化をとらえることができるという面がある。サイノカミ行事の研究は、道祖神との関係を中心に展開されてきたが、神野善治¹¹や石田哲弥¹²は、サイノカミ行事と木製の祭り小屋との関連も言及している。サイノカミ行事と雪室と木製の祭り小屋の関係を研究していく上で、貴重な研究であるにもかかわらず、サイノカミ研究では行事の中で作製される雪室についてほとんど注目されることがなかった。それは、サイノカミ行事における雪室の事例報告が少なかったことが主要な原因であったと考えられる。

民俗事象の地域性を考えていく場合、その民俗事象に影響

響を与えた要因である環境を考慮する必要がある。雪国という環境によってどのような影響を受けたか、特に雪という観点からサイノカミ行事における雪室の特性は研究すべき課題であろう。一方、雪室の研究から見ても、サイノカミ行事の時に作製される雪室を対象とした研究はほとんどなかった。

サイノカミ行事の雪室を取上げた理由は次の四点である。

① これまでサイノカミ行事の雪室は研究されてこなかったこと。

② サイノカミ行事の雪室の分布傾向が不明であったこと。

③ 現在でも行われている地域があり、または復活した地域が多いことから、現在でも行うことに意味がある雪室であること。

④ サイノカミ行事の雪室は行事の最中に作られることが多いため、サイノカミ行事の内容自体が明らかになるとともに雪室が作られていない地域のサイノカミ行事と比較すると雪室の存在意義が解明される可能性があること。

本稿ではまず雪室の分布を明らかにする。ついで、その中から詳細な雪室の事例報告をし、それらの事例から、サ

イノカミ行事の時に作製される雪室の変遷を辿り、その要因について考察したい。さらにサイノカミ行事の雪室の特質と存在意義を解明することを試みる。

二、サイノカミ行事の時に作製される雪室

サイノカミ行事の時に作製される雪室は平成十二年から十七年にかけて調査した結果、山形県平田町、立川町、羽黒町、朝日村、温海町、福島県金山町、田島町、新潟県山北町、十日町市、川西町、長野県南小谷村の十一市町村に存在することが判明した。それらの市町村は図2に示されるように日本海沿岸または内陸部に位置する。平田町、田島町針生、山北町雷、十日町市新水の五市町村は雪室について詳細な報告がなかった地域であるため、¹³ 実際行われた行事の調査記録及び聞き取り調査によって明らかになったことを報告する。福島県金山町に関しては、「サイノカミの時は札が多くあるので、きれいなものは芯木に藁を巻いたサイノカミ柱につけ、あとはユキンドウと呼ばれる雪穴型の雪室の中に藁を敷いてその中で焼いた¹⁴」という程度しか分からなかった。また、川西町では小さい雪穴型の雪室を作り、その中に二対の神を安置していた。南小谷村では

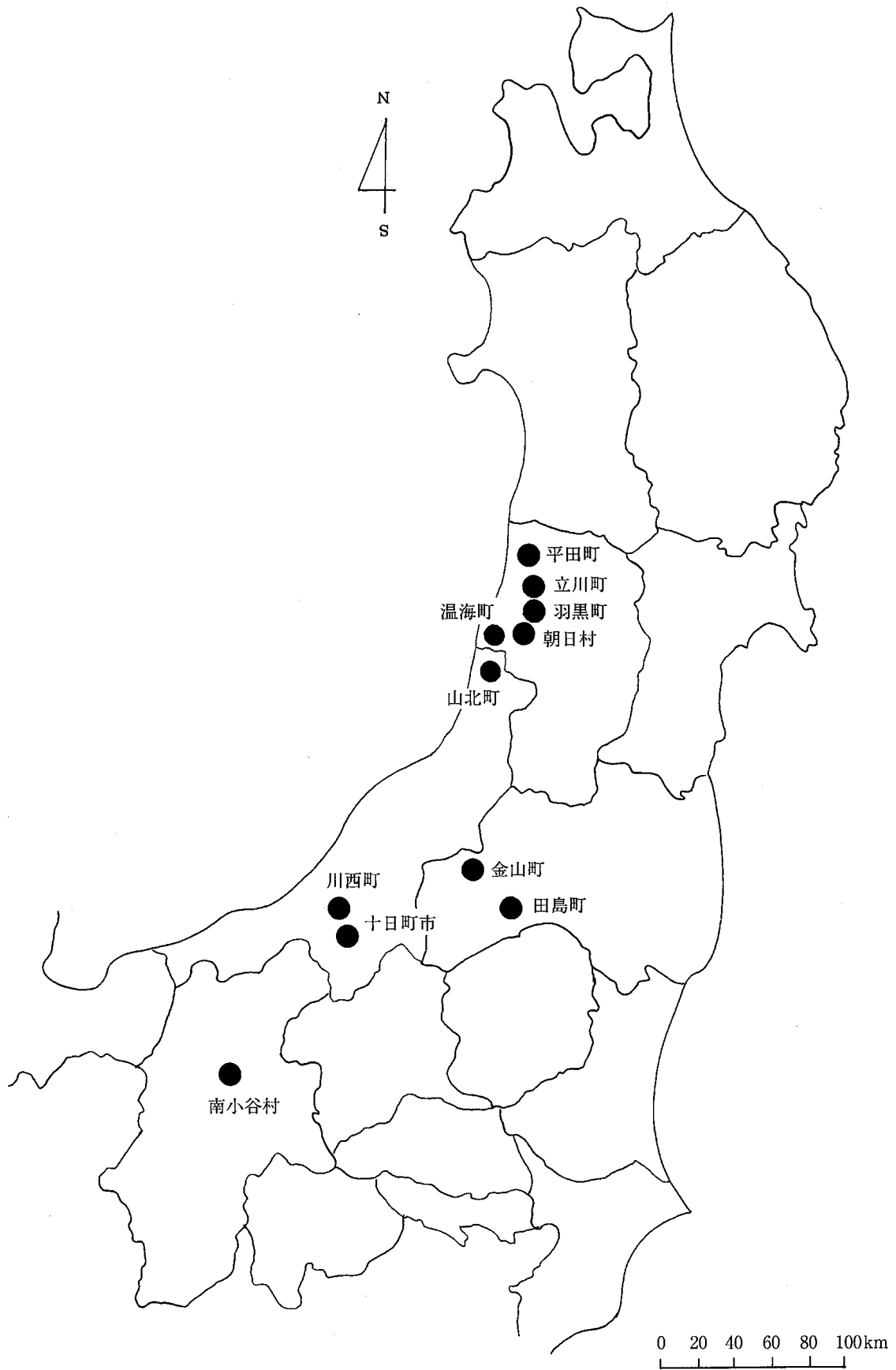


図2 サイノカミ行事の雪室の分布
 (現地での聞き取り調査などにより作成)

木を削って似顔絵を描き、子供の人数分だけ作った。雪室の中にはその神と大根にさした蠟燭を供えていた。立川町、羽黒町、温海町には雪室の詳細な報告があるが、雪室研究上取上げられてこなかったため、大要を示す。

事例一 新潟県十日町市新水¹⁵⁾

一月十五日の午後、青年を中心にドウラクジン焼きを行う。御神木であるドウラクジンは、杉を芯木にし、藁を巻き付け、頭、手をつけた藁で作った人形である。ドウラクジンの周辺に雪山を作り、穴をあけ、小さな雪穴型の雪室を作る。その中に御神体であるドウラクジンを二体安置する。このドウラクジンはだんごの木に目鼻を描き、袴を着せて下の方を紅白の水引で結んでいるもので厄年の男の人が作る。雪室にはドウラクジンを祀り、蠟燭を一本立てる。お昼頃、雪室の中に灯された蠟燭から火をもらい藁束に点火する。その火を今度は御神木であるドウラクジンに火をつける。昔は厄年の人が火をつけていた。現在ではドウラクジンを燃やす時に歌は歌わないが、かつては「ドウラクジンのほかかえもんざきよばれてそのるすに自分の家をやかれた」という歌を歌った。御神木のドウラクジンの火が勢い

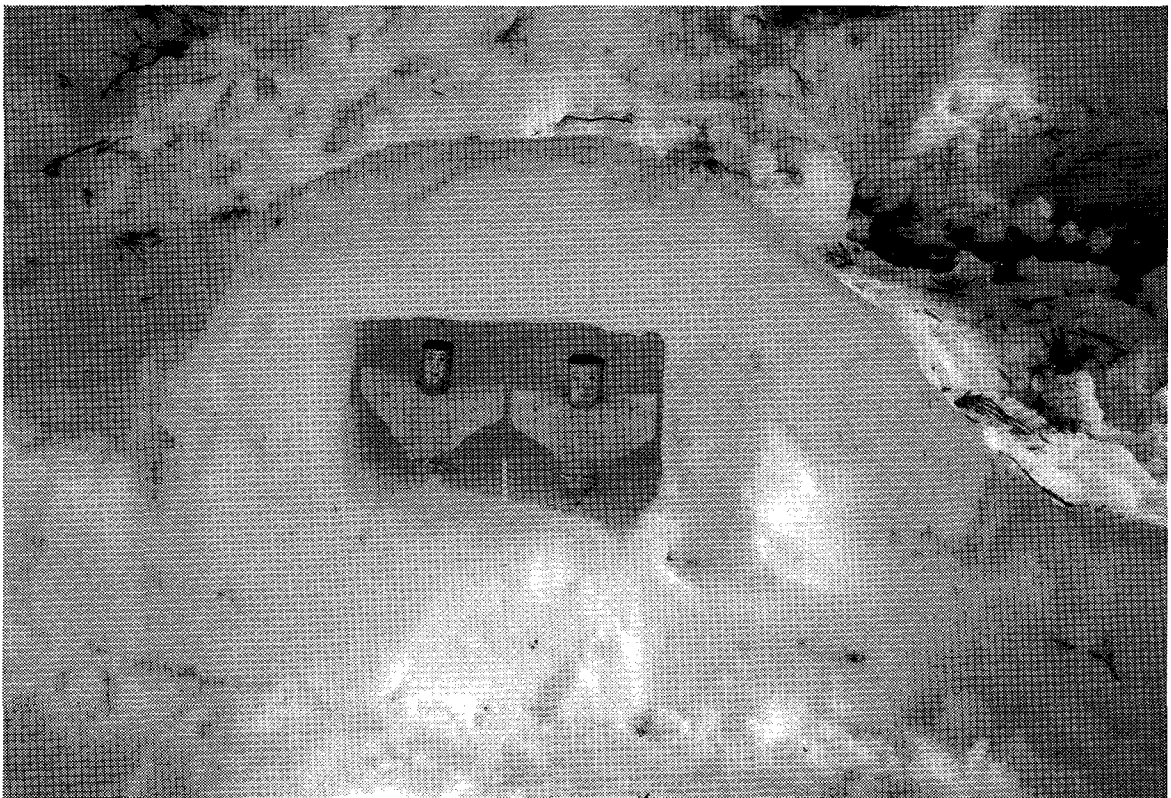


写真1 新水の雪室と御神体

よく燃え上がると集落の人々は餅やスルメなどを焼いて食べる。終盤にさしかかってくると、雪室に祀られていた御神体であるドウラクジンを火に投げ入れる。それが終わると今度は「ハネツカエシ」をする。これはコシキで、羽根突きをするというものである。昔は自分の気に入った子に羽を投げ返すという男女の出会いの場であった。

事例二 新潟県山北町雷⁽¹⁶⁾

新暦一月十五日にカマクラと呼ばれる丸い雪室を作る。一月十五日にその年の豊作を願うサイド焼きを行う。まず、子供が先頭になって、山から木を切り、切った木に藁をかける。夕方になると集落の人が集まり、木に点火する。カマクラの中には男性のシンボルを田の神、火の神として祀り、蠟燭を灯し、賽銭を上げる。サイド焼きが始まるとカマクラの中に入り、田の神と火の神に感謝し、お参りをする。

事例三 福島県田島町針生

【戦前の雪室とサイノカミ行事⁽¹⁷⁾】

旧暦一月十四日の朝から、サイノカミを立てる周辺に

「夕ドリ朝ドリ」と呼ばれる雪室を作った。サイノカミは^{カミシモ}上と下に一つずつ作製した。図3に示したように両集落とも南東に立てており、そこは境である。これはお年寄りの人が作った。雪城型の雪室を作り、その脇と正面に棚を作った。(三カ所) 入口には注連縄を張り、台上には松を立てた。注連縄や松は正月に使用したものを使った。

上と下でそれぞれ御神木を立てて行っていた。一月二日に厄年の人が御神木を上と下でそれぞれ二本切っておいた。四日にオンベの神と呼ばれる木(大きい木)を御神木の立てる場所に引っ張って行った。五日はコゼの神と呼ばれる木(小さい木)を引っ張っていった。

十四日の朝、オンベの神とコゼの神を立てた。立て終わると厄年の人は大天狗(四十二歳)と烏天狗(二十五歳)の面をつけた。⁽¹⁸⁾サイノカミに火をつける前に、女の人が蠟燭と供物(餅)と賽銭を持って「夕ドリ朝ドリ」のところまで行き、棚の中に蠟燭を灯し、餅を供えたり、賽銭をあげたりした。そして、参拝をした。これは水子の供養のためであると言われている。「夕ドリ朝ドリ」は参拝し終わると松や注連縄などはサイノカミで燃やして片付けた。

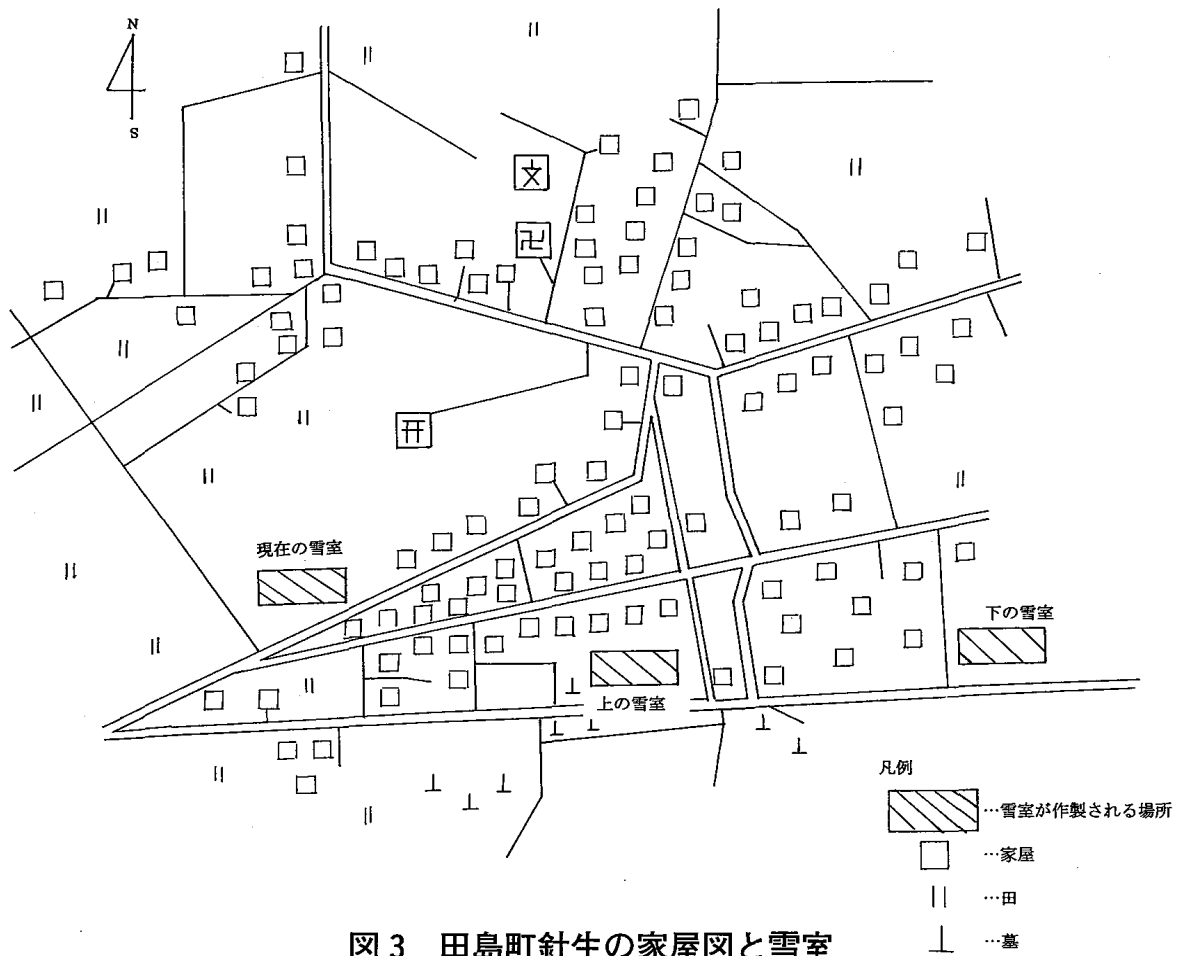


図3 田島町針生の家屋図と雪室
 (現地での聞き取り調査などにより作成)



写真2 田島町の雪室

十九時頃になると大天狗と烏天狗をつけた者が火をつけた。大天狗はオンベに、烏天狗はコゼに火をつけた。また、サイノカミが燃えると、十三日に作った団子をそこで焼き食べた。サイノカミで焼いた団子を食べると無病息災でいられるという。

【現在の雪室とサイノカミ】

戦時中は一時中断していた。戦後になつて復活するとサイノカミは上と下あわせて一カ所で行うようになり、「夕ドリ朝ドリ」と呼ばれる雪室も一カ所で行つた。一月四日に古峰ヶ原神社に参詣し、御神木を切り、集落を廻り、サイノカミを行う場所に持つて行く。

十四日の九時頃、サイノカミの準備、夕ドリ朝ドリと呼ばれる雪室を作製する。夕ドリ朝ドリの作り方は次のようである。雪を積み上げて四方一メートル位の雪の壁を作る。入口には柱を二本立て、注連縄を張る。その両側にも注連飾り（昆布、煮干を挟む）をつけた松を立てる。そして、雪壁上には四方に松を立て、注連縄を張る。中には正面奥、左右の三カ所に棚を掘る。外形は雪穴型に相当する。十六時頃、星武氏宅にて厄年の人が集まり、茶を飲む。十六時四十分、天狗の格好をして星宅を出発する。十六時五十分、

古峰ヶ原神社へ行き、参拝する。十七時に厄年の人は星宅にて夕食をとる。

十八時三十分頃、星宅から大天狗、烏天狗が出発し、夕ドリ朝ドリとオンベ、コゼと呼ばれる御神木が立てられている青年館に向かう。夕ドリ朝ドリの棚には燈明が灯され、御神木の周囲には集落の人が集まり、大天狗、烏天狗が到着するのを待っている。大天狗、烏天狗は夕ドリ朝ドリの中に入り、参拝した後、まず大天狗がオンベに火をつけ、烏天狗はコゼに火をつける。その後、集落の人は夕ドリ朝ドリに参拝し、賽銭をあげ、御神木の火で餅を焼いて食べる。この餅を食べると風邪をひかないという。一方、大天狗や烏天狗は集落の人に酒を振舞う。最後の方になると夕ドリ朝ドリに飾られていた注連飾りや松は取り払われ、御神木とともに焼かれる。二十時に終了する。

事例四 山形県平田町

平田町のサイノカミ行事は第二次世界大戦後に途絶えた。昭和初期のサイノカミ行事及び雪室の状況に関しては聞き取り調査によって明らかになった。昭和六十一年からは旧阿部家において行事や雪室が復活した。¹⁹⁾

【昭和初期のサイノカミ行事と雪室】

サイドウは少年の行事である。最年長の少年を一別当と称し、あとは、年齢順に二別当から四別当までであった。雪室はセンドウと呼んだ。センドウとはサイドウ（塞道）の転訛した用語で、「悪が村に入るのを防ぐ」という意味である。十五日の朝、行事に参加する子供が、センドウの上のせるサイド小倉の材料である薪、柴、炭を各家に回って集めた。大人が、雪室の上に木材でつくったサイド小倉をのせた。その塞道の入口には、門松を一本ずつ両側に立て、上にはボンデンを立てた。両方とも神の依代と考えられているものである。中は、神棚と炉を作った。

十五日の十二時頃に、男子がタラの木で作ったサミノ神棒を持って集まった。タラの木には、魔除けの意味があると伝えられてきた。一別当である少年がホンテイ棒（御神体）とヅクリ棒（男根の形をしたもの）を雪室の神棚に祀った。その後、少年は中に入り、真ん中の囲炉に火を焚き、サミノ神棒で炉縁を叩き、その調子に合わせてセンドの唄を唱える。

ホンテ　ホンテ　サミノカミノ　キマリハ　イツチャ
ク　ハツチャク　ミツブセ　ナカキリキリ　キンノンド

サカベグス　ヤマガタ　ヤマガタノ　コドモワ　イチノ
ワリ　コドモデ　ハネルキヲ　キツテキテ　テデワラ
ヤケシタヤケシタ　ジロヤ　タロヤ　ハツマンモテキテ
ヤリケセ　ヤホ・・・メレーメレー²⁰

少年たちがサイドウを行っている最中に、大人がお参りに来る。参拝する大人は一別当に神酒と餅を差出し、一別当がそれらを御神体に供えた。夕方になるとサイド焼きをした。行事に用いた御神体やサミノ神棒等はその時に燃やし、サイドウは壊した。翌日まで残すのは緑起が悪いと考えられていたためであった。

【現在のサイノカミと雪室】

新暦一月十一日に旧阿部家にて小正月行事を行った。これは子供に昔の生活を知ってもらうために、小正月行事を実際に子供に体験させるものである。したがってその目的を遂行するため、行事の他に小正月行事についての講演も組み込まれている。また昔の生活を体験してもらう一つの手段として子供が楽しむことが出来る昔の遊びも取り入れられている。

十時三十分から梨だんご作りをする。十一時二十五分、旧阿部家の庭で雪中田植え²¹をする。その後、ソリ遊びや竹

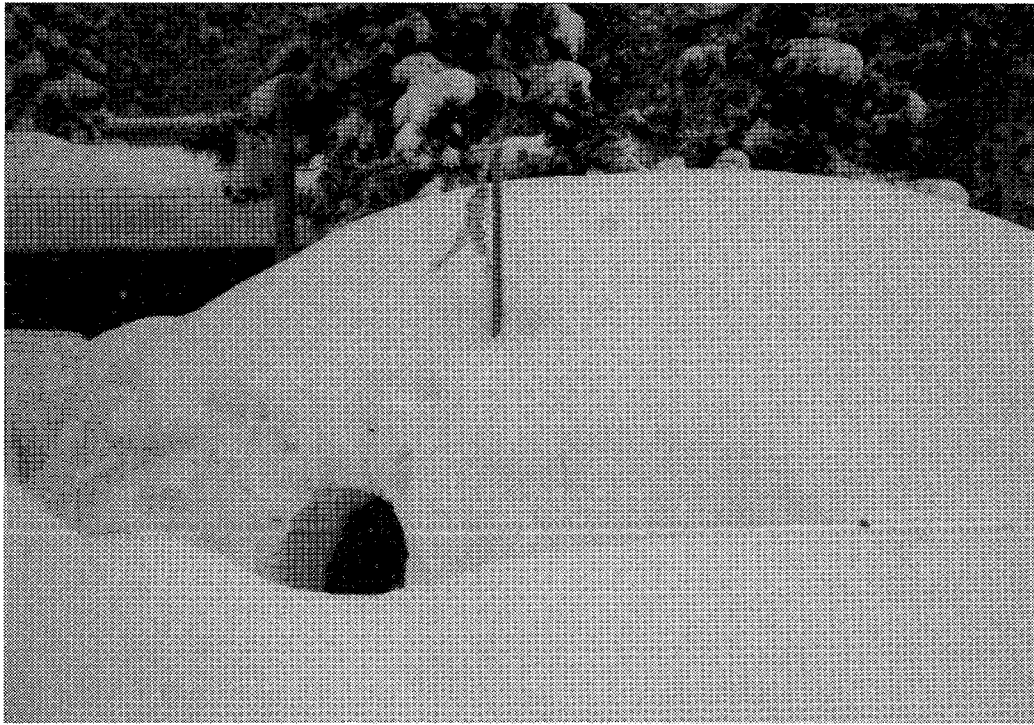


写真3 平田町の雪室

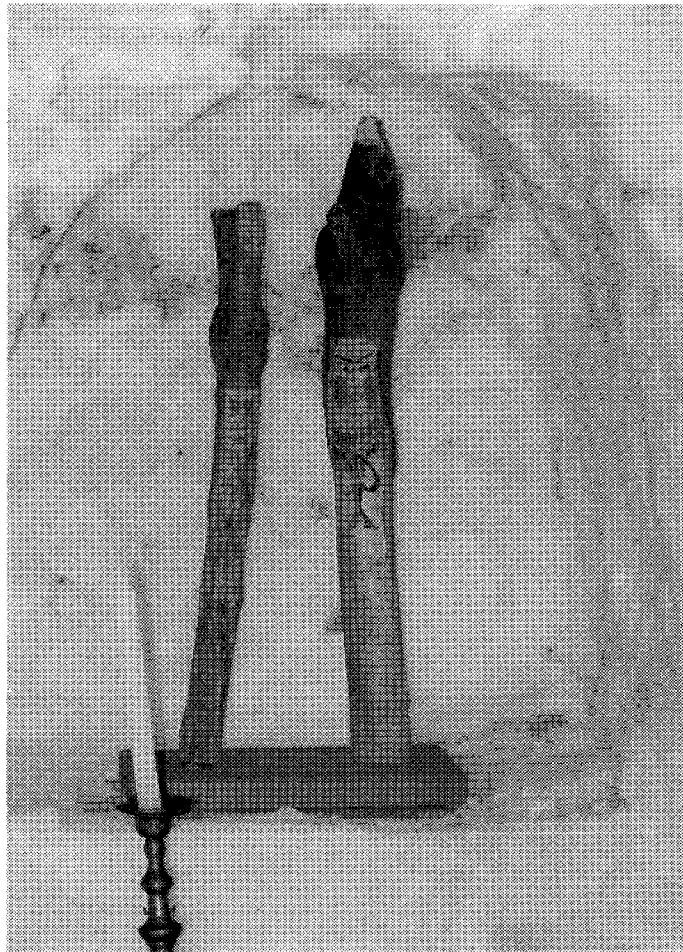


写真4 雪室の中に祀られた御神体 — 平田町 —

スキーなどをして昔の外遊びを子供に体験させる。十二時五十分、再び旧阿部家に入り廿日灸⁽²²⁾をする。十三時十分、郷土史家佐藤春夫氏が昔の小正月を説明する。

十四時三十分、カマクラ参りをする。カマクラは旧阿部家の入口付近に作られている。平成十三年に作製された雪室は、雪穴型で、上にボンデンを一本立てたものである。中に神棚を作り、そこにタラの木で作ったホンテイ棒（御神体）を二組祀っている。神棚の前に小さな机を置き、机上には神酒を供え、蠟燭を灯す。子供や親が次々と中に入り、神に向かって参拝する。それが終わると、サイド焼きをする。

事例五 山形県朝日村大綱⁽²³⁾

【昭和初期から平成八年までの雪室とサイノカミ】

旧暦一月十六日にモロを作る。これは、雪穴を三つ掘り、その三つの穴を行き来できるように通路をつけたものである。そのモロの中でジャンケン⁽²⁴⁾をして、勝った家の者の通りに、神社へ行く道を作ることになっていた。神社へ行く道には、上・中・下の三通りの道があり、例えばその年に上の家の者が勝ったら、上に道を作ることになっていた。

翌朝勝った家の者の通りに男子が集まり、雪を踏み固めて神社へ行く道を作った⁽²⁵⁾。朝飯を食べてから、男子は神社へ行き、四角に掘った小さな穴に札を立て、蠟燭と御幣を立てた。これをドウと呼んだ。また、男子は高さ一メートル半ぐらいの雪の台を作り、これもドウと呼んだ。頂上を踏み堅めて雪壁を作り、そこに松とマメガラ、ミズキのワツカに幣束をかけたものを立てた。ドウには、登れるように階段をつけた。そのドウの横に穴を掘り、階段をつけ、そこに藁を立てて、その中に札をいれた。

夕方になると、大人が神社にお参りに行くが、その前に子供は、大人を引張ってドウ（小さな穴の方）に連れて行き、「拜んでくれ」と言った。大人はドウに向かって拝み、賽銭をまいて、宮参りに行った。大人は宮に餅を供えた。

子供たちは、その餅を集めて、神社に近いおじいさんの家で雑煮を作ってもらい食べた。宮参りは夜八時頃まで行った。

一月十八日の朝、男の子たちは烏帽子をかぶり、トウヤの家に集まる。トウヤとは行事を主催する家のことを言う。太夫は羽織、袴をはき、幣束持ちも羽織を着た。それから神社まで行き、昨日作った穴の中にある幣や札を焼いた。その穴を囲んで、子供たちが並ぶが、ドウのすぐ脇に太夫、

その隣に幣束持ちが並んだ。太夫が拍子木を叩くとそれに合わせて「君が代」を十二回歌った。かつては「君が代」ではなく、サイノカミの歌が歌われていたが、性に関する語が多かったため、子供の教育上、ふさわしくないということ、明治三十七、三十八年頃に「君が代」を歌うようになったと言われている。²⁶サイノカミの歌の歌詞については後述する。それが終わると太夫がドウに登り、ドウの上を立ててある幣束に向かって拜んだ後、幣束を持ってドウの上から降り、幣束持ちに渡した。他の子供たちは太夫が拜んでいる最中に餅を投げ合った。これは、悪魔祓いとされている。幣束持ちは並んでいる子供の頭を幣で祓った。その後、トウヤに戻って「君が代」を三回歌い、村の家々を一軒一軒回る。各家の中に入り、「君が代」を二回歌い、その家の者を幣束で祓った。寺では二十一回、「君が代」を歌った。これは、お昼頃まで行った。

事例六 山形県立川町²⁷

『町の文化財・総集編』にさいどと呼ばれる雪室のことが書かれている。かつては旧暦の一月十五日に行われていたが、現在では新暦で行う。その一カ月前に柳の木を伐つ

てきて、神棚の上にあげて置き、乾燥してから、それを削って烏帽子姿の顔を描いてせど神様（書く時は、お妻の神と書く）を作り、出来上がると床の間に、その他の御神体などと一緒に飾っておく。今は五色のボンデンを切つてすましている。十三歳までの男子がいる家では必ずといっていいほど、せど神様を作った。各家では十四日には灯明をつけ、神酒をあげて拝み、せど神様をさいどへ持つて行って飾る。十四日には大人が手伝つて雪を十坪ほど掘つてさいどを作る。その中に神棚を作つて、せど神様を祀り神酒、蠟燭などを供える。男子はご馳走などを持つて集まる。

十三歳の年長の男子を別当と言つて、さいどに祀られているせど神様に参詣に来た人達に神酒を飲ませる。男子の行事ではあるが、男子がいない家でも参詣には行った。夜になると、松飾りや注連縄、書初めなどをさいどに持つて行き、「笑らた笑らた 天まであがれ」とか「ああ せど神さま笑らた笑らた あがれあがれ」などと言いながら、せど神様も一緒に焼く。

事例七 山形県羽黒町手向²⁸

『日本の民俗 山形』に、ムロと称される雪室について

触れている。十四日の朝、子供は登校前にムロをつくり、夜は勧進に歩く。男子は朴の木で烏帽子頭のサイノカミを、女子は姫頭の神像を作る。十五日の早朝、餅やミカン、賽銭とともにサイノカミと姫頭の神像を持ってムロに参る。女子が来ると「○○さんの婿はメッコ（盲）で鼻欠けで、イザリのテツケ（手なえ）で、いい婿とるように、いい婿とるように」と歌い囃しながら太鼓を打つ。男が来ると「婿の」を「嫁」に言い換える。その日、学校から帰ると、山から松一本と椿の枝を大量に切ってくる組と、家々から門松や飾り松を集める組とに別れ、それを田圃に積み上げて硬く縛る。これをセエドバシラといい、夜になると火をかけて焼く。燃やしながら、サイノカミ歌を歌い、餅を焼いて食べる。この餅を食べると風邪をひかず、虫歯にもならないという。終わったら、ムロに帰り、貰い集めた餅やミカンを食べ、銭を分配する。

事例八 山形県温海町越沢⁽²⁹⁾

『温海町の民俗』にコヤと呼ばれる雪室が記されている。行事当日の昼過ぎに、セノ神の世話役の「カギドリ」名右エ門がセノ神のコヤ（ホコラ）を作る。コヤは横約一メートル

ル、高さ六十センチメートルである。雪のコヤの奥に、ジジとババというホウノキで作った長さ二十四センチメートル、径四、五センチメートルほどの人形二体を飾る。ジジ、ババに墨で顔を描き、上部は削りかけがしてある。その前には蠟燭と「十二月吉日」（ハツテン）を立てる。コヤの側に供えた餅を入れる桶が置いてある。準備が終わった後、子供が丸餅二個を持って参詣に来る。餅を供え、「メッコデ タツコデ ハナカゲデ キンカデ カダワデ キカネ 嫁（婿）授かるように」と唱えごとをして拜む。

終わるとコヤの前にある餅を一個貰って家に帰る。昔は男子と女子が餅を交換したと言われている。家に帰ると、この餅をさいの目に切り、「こっちは誰」「こっちは誰」と母や祖母が子や孫の結婚相手を選んで並べて囲炉裏で焼き、餅が膨れて互いにくっつけば将来結婚できると言っているんだという。

三、サイノカミ行事における雪室の変化

平田町の昭和初期と復活後の雪室を比較すると違いが見られる。雪室の名称であるが、昭和初期では「センドウ」と呼ばれていた。「センドウ」は、サイノカミ行事の目的

でもある「村に悪いものが入ってこないように防ぐもの」という意味を持っている。復活後はその意味が無くなり、「カマクラ」という名に変わる。この名称に変化した理由として考えられるのが、行事の目的による変化である。昭和初期は、前述したように悪が村に入ってくるのを避けることを目的としていた。だが、村の境という概念が薄れたことにより、行事の目的も変化したのではないかと推測される。復活後の行事は、子供に昔の行事を体験させることによつて、昔の生活習慣を知ってもらうことを目的としている。そういう意味で、雪室の名称も全国的に知られており、子供に親しみやすい「カマクラ」という名称を使用していると考えられる。

雪穴型の雪室を作製し、上にボンデンをさし、中に神棚を作り、神を祀ることは、昭和初期と復活後も同じである。しかし、昭和初期では雪室の上のせるサイド小倉を作り、入口に門松を立てている。そして中には炉を作っている。つまり、雪室は複雑な形であったのが、簡略化されたのである。それは行事の内容に関連してくることである。昭和初期ではセンドウの中で、炉をサミノ神棒で叩き、歌っていた。一方、復活後には中に入って参拝するのみである。つ

まり、昭和初期では長時間中に入って火を焚き、行事を遂行するため、通気性をよくしようと雪室の上にサイド小倉をのせたのではないだろうか。また炉を作るのも、歌う時にサミノ神棒で叩いて調子をとるためであるとともに、長時間中に入るのを、暖をとるために作製したと考えられよう。門松を立てるのは、行事を行う神聖な空間という意識があったからではないかと推測される。

大網のサイノカミ行事は少子化により、平成七年から八年ごろに行われなくなった。大網には明治時代のサイノカミ行事を記した書物がある。それが「大網のサイの神行事³⁰⁾」と『朝日村誌(二) 神社は語る上³¹⁾』である。それらに書かれた記録と昭和時代の雪室とサイノカミ行事には違いが見られる。雪室について明治時代の記録には「大晦日の早朝、サイドウ頭の子供がいるオトナが一人ずつで、ヨギモロをつくる。入口には階段をつくり、正面にサイの神をまつる壇を設ける。これを上壇³²⁾という」とある。また神を祀る壇について「其の年の明き方に向かった所に祭壇を \wedge 形³³⁾に掘り込み、この所に塞の神を安置する」と説明がある。つまり、明治時代の雪室はヨギモロと呼ばれ、櫓型で患方の方角に神棚を作り、サイの神を安置する場であった。一

方、昭和時代はモロと呼ばれる樽型、ドウと称される雪穴型、そしてもう一つのドウは櫓型と三タイプの雪室が作られていた。モロは神社へ行く道を決める場として、雪穴型のドウは幣束を祀る場として、櫓型のドウは行事を行う場として利用されてきた。なぜ、昭和時代には三つの雪室が作られていたのかは不明であるが、中に祀る神は明治時代ではサイノカミ、昭和時代では幣束となっている。その理由について、サイノカミは性の神という面もあることから、大人が、子供の教育に良くないと考え、幣束に変えたと言われている。また理由としてもう一つ考えられるのが、交通の発達により境の觀念がなくなったことであろう。サイノカミは境の神であるが、その信仰が薄れてしまったため、幣束に変わってしまったのではないかと推測される。

サイノカミ行事にも相違点が見られる。行事の中心となる者は明治時代では「サイドウ頭³⁴」と呼び、昭和時代では「大夫」である。行事の様子について明治時代の文献には次のように記されている。

サイの神は「キンマラサマ」とも呼ばれた。その上部を男形に刻み、ベンガラで赤く塗って、中央は藁で包み三ヶ所を結んだものである。朝食後、子供たちはヨギモ

ロに集まり、唱えごとを三度唱えてから、キンマラサマを奉じて集落中を回るのである。キンマラサマをかつぐのはサイドウ頭である。家々の入り口に着くと、子供が歌を歌う。

セエドウセエドウセエンの神のキンマラはイツチャク
(一尺) ハツチャク (八寸) ニイツブセ (三つ伏せ)
ナカドントクインビレデ (中が、どんと、くびれて)
サーギヤ (先は) ギンボシ (擬宝珠) ヤンマガタ (山形)
ヤンマガタのコードモハ (子供は) アンマリ (あまり)
イージャ (意地が) ツツパッテテテ (父) のマラ
(男性の生殖器をいう方言) ヤツタクテアツパツ (母に)
コトカンガセテ次郎や太郎やホンダレ (ホダレ)
キツテ (切つて) ネンジコネンジコ

夕食をすますと、子供は藁とマキをたずさえてモロに集まる。若者はモロの隅にマキを何本もさし、その上に藁の束を和み、それから火をつける。火勢があがりだすとキンマラサマをほうりこむ。やがて、キンマラサマをひきだし、モロの外に投げる。翌朝早く、子供はこれを山の神に奉納する。

以上のように、明治時代ではサイノカミ行事の神である

キンマラサマを中心とする行事がなくなってしまうたのである。その理由は雪室の変化で前述したように境の神であるサイノカミ信仰の薄れであると考えられる。雪室も行事の変化に伴い、変わっていった。

針生の雪室とサイノカミ行事の戦前と戦後で最も大きく変化した点は、戦前では集落を上と下に二分し、それぞれ一カ所ずつに雪室を作製し、御神木を立てていたのが、戦後になると一カ所にまとめて作られるようになったことである。集落を上と下に二分し、全く同じ雪室を作ることとは双分制の形態をとっていることになる。双分制とは集落を二分し、それぞれの部分が名称を持つとともに、宗教、政治、その他の行事に関して、相互的、競争的な機能を営んでいる制度を言う。集落内を二分して競争することで、互いの競争心が高まって、集落内の団結力が強まり、集落内の統合がしやすい点が双分制の特質であるといえる。⁽³⁵⁾戦前では上と下の境があり、戦後になって、上と下あわせて一カ所で行われるようになったことは、上と下の境の意識が希薄になっていたことを示唆する。それは生業の変化の影響によるものであると考えられる。かつて、基幹産業は第一次産業である農業であったが、スキー場の建設など、観

光事業も発達していくと、しだいに第三次産業へと移行していく。移行する中で、共同で行う労働であった農作業や山に関する仕事が増少してきた。逆に個人で行うようになり、集落の共同意識はしだいに低くなってしまった。その意識の表れが雪室にも反映したと推測される。また、双分制の特徴である外婚制もその要因に少なからず、影響を与えていたのではないかと考えられる。岩田を含め、多くの研究者達は、双分制は婚姻関係に見られると主張している。⁽³⁶⁾外婚制とは血が濃くなるのを避けるために集落を二つに分けて、互いに婚姻関係を結ぶことを言う。⁽³⁷⁾それがその婚姻の他に集落の共同意識を高める祭りにも双分制が表れるようになった。⁽³⁸⁾しかし、交通の発達により針生集落内外も婚姻圏内になると、上と下で分ける必要もなくなってくる。そこで、双分制の機能も必要とされなくなり、しだいに上と下に分けて行事を行う理由も忘れ去られ、ついには行事自体が上と下で一緒に行われるようになったと推測される。さらに、少子化により、行事の担い手である青年の減少により、行事を上と下で行うことが不可能になったことも挙げられる。

新水ではサイノカミ行事自体に多少の変化があった。ま

ず「ドウラクジンのほかが：」の歌が消えてしまったことである。平田町や朝日村も前述したようにサイノカミの歌がなくなっている。サイノカミ行事の簡略化はサイノカミの信仰が希薄になっていくことを示している。また行事の後の「ハネツカエシ」もかつては男女の出会いの場であったのが、現在では既婚者が行っている。それは集落内での結婚というのがほとんどなくなり、出会いの場を祭りに求めるということがなくなったからであると思われる。

これまで、集落ごとの変化を見てきたが、それらを含めて、サイノカミ行事における雪室の変遷とその要因について検討していきたい。江戸時代においては武士、農民ともサイノカミ行事は行っていたが、サイノカミ行事の時に雪室を作製したことが記されている文献は、武士の方しか残されていない。その地域は『出羽国秋田領風俗問状答』⁽³⁹⁾や『秋田風俗絵巻』⁽⁴⁰⁾などに記された久保田城下と『北越月令』⁽⁴¹⁾、『越後国長岡領風俗問状答』⁽⁴²⁾などに書かれた長岡城下である。これらの地域のサイノカミは、その家を継ぐ男子の祝儀を目的とし、それは家単位で行われる行事であった。そして雪室には神の依り代とされる飾り物をし、神を迎える場となっていた。久保田では雪室の中に俵などを入れ、点

火し、その火を俵につけ、体の周囲を回す、いわゆる火振り⁽⁴³⁾を行っていた。一方、長岡では、その中に神を安置し、神酒を供え、酒宴を開いた。このように、雪室は男子の祝儀を目的とした行事の中で作られ、行事の中心的な場所として利用されていたのである。それが、明治に入り、武士社会が崩壊すると、男子の祝儀を目的とした家単位の行事であるサイノカミ行事は消滅し、集落で行うサイノカミ行事だけが残された。明治時代から昭和初期ぐらいまでは集落の境を意識したサイノカミ行事であった。この当時は平田町のように雪室を「センドウ」と呼び、集落に悪いものが入ってこないように防ぐものという意味を持っていた。

朝日村大綱では大正時代にすでにサイノカミに対する意識の希薄が表れていたが、それ以前は雪室の中にサイノカミの神であるキンマラサマを祀り、さらにその行事の中心的な担い手を「センドウ」と呼んでいた。針生においては集落を二分し、上と下、それぞれに雪室を作るという双分制の形式をとっていた。そして、平田町、朝日村大綱、十日町市新水ではサイノカミの歌も存在していた。

以上のように、集落ごとに雪室や行事の内容の違いは見られるが、集落の境を意識していた行事や雪室だったこと

が窺える。だが、戦後になると大きな変化を遂げる。平田町では子供に昔の習慣を知ってもらおうという教育的な目的に変わった。朝日村大綱では子供の教育に良くないとし、性の神様という性格も伴うキンマラサマを祀ることを禁止し、御幣に変え、「センドウ」も「大夫」となった。針生も上と下の境がなくなり、一カ所で行うようになった。このように戦後になると、境の観念は薄れ、行事も雪室も境を意識しなくなった。それは、交通の発達により、他地域との交流が盛んになり、婚姻圏も広がり、集落の境に対する意識が低くなったことが挙げられる。また生業の変化もその要因の一つである。農業などの第一次産業を基幹産業としていた社会では、労働も互いに手伝うため、共同意識があった。それが、第三次産業に移行していくうちに、個人的な仕事が多くなり、集落の中で一緒に労働をするこゝとがなくなっていく。こうして、集落内の意識が弱まってくる。隣集落などに対する対抗意識も無くなり、境に対しても関心がなくなっていくのではないかと考えられる。

これまで述べてきたことが、サイノカミ行事や雪室に対して大きな影響を与えてきたと推測される。このようにサ

イノカミ行事は境を意識して行われなくなり、そこで作られている雪室も同じような道を辿ったのである。さらに、現在では年中行事として、小正月に行われるサイノカミ行事や雪室とは別に新たに雪祭りの時に、サイノカミ行事が行われ、雪室が作製されるようになった。例えば、福島県三島町では二月に開催される「雪と火のまつり」の中で、サイノカミを行い、周辺に雪室を作っている。このようにサイノカミや雪室は集落以外の人たちも見えて参加できるようになり、楽しむものとなってきた。それは第三次産業である観光業が発達してきたからではないかと思われる。観光客に見て楽しんでもらうように、サイノカミも雪室も変化してきたのである。

四、サイノカミ行事の雪室の特色

このように、行事の内容や目的の変化によって、名称、形も変化を遂げた。しかしながら、昭和初期と第二次世界大戦後の雪室とサイノカミ行事には共通点がある。平田町では雪室の上に神の依り代であるボンデンが立てられ、中には神棚を作り、御神体を祀っていること、そして神に向かつて参拝することである。つまり、サイノカミ行事に作

製される雪室は神を祀り、行事の中心的な場であることが窺える。したがって、ここでの雪室は祭壇としての役割を果たしており、それがサイノカミ行事の中での雪室の意義であったといえる。

朝日村大綱では祀る神は違っても雪室の中には神を祀っている。明治時代には、雪室が作られる場でキンマラサマを取り合う行為をするというように、雪室を行事の中心的な場として利用している。昭和時代でも、雪穴型の雪室を参拝し、櫓型の雪室の上で神主が唱えごとをして御祓いするなど、行事の重要な場となっている。したがってサイノカミ行事の時に行事の中心的な場として利用されている雪室は、昭和時代でも変わらないのである。神を安置し、参拝した後の雪室の利用方法に関しても共通点が見られる。明治時代の記録に「神座の隅に薪を交互に差し、それに藁を掛けて燃え付きの良いように作り、それに火をかける⁽⁴⁴⁾」とあり、雪室の中に作られた神座を焼くことが記されている。昭和時代でも雪室の中に祀ってあった幣や札を焼くところがある。このように、雪室は幣などを燃やす場として利用されていたのである。金山町大塩でも山形県朝日村大綱のように札を焼く場所とされていた。

雪室の中に神を祀り、参拝する事例は朝日村周辺の地域にも見られる。温海町、立川町、羽黒町である。温海町ではセノ神のコヤと呼ばれる雪室を作製する。コヤの奥にはジジ、ババと呼ばれる人形を二体飾る。準備が終わると子供が餅を持って参詣する。餅を供え、唱え言をして拝む⁽⁴⁵⁾。立川町ではさいどと呼ばれる雪穴型の雪室の中にせど神様を祀り、参拝する⁽⁴⁶⁾。羽黒町手向ではムロを作り、サイノカミと姫神を祀り参拝する。このように、朝日村周辺地域の雪室も朝日村と同様に、雪室の中に神を祀っていた⁽⁴⁷⁾。それを集落の人が参拝するというように雪室は宮のような存在であったと推測される。

針生の戦前と戦後の雪室とサイノカミ行事の共通点は、雪室の名称や形、その利用方法に関して変わらないことである。特に形について注目すると、雪城型で注連縄や門松などの飾り物をする⁽⁴⁸⁾ことは、江戸時代後期の出羽久保田のことを記した『出羽国秋田風俗問状答』などに描かれた雪室に類似している。また雪室の飾り物の種類は越後塩沢の『北越雪譜』の櫓型の雪室に飾られたものによく似ている⁽⁴⁹⁾。このような飾り物は神の依り代とされ、その場で行事が行われていた。針生の雪室にも注連縄や松などの飾り物をし

ていることから、雪室には神が宿る場であったと推測される。さらに、サイノカミ行事の担い手である大天狗や烏天狗が御神木に火をつける前に雪室の中に入り、燈明がたてられている棚に向かつて参拝する。針生の雪室は神を祀り、参拝する場とされ、宮のような役割を果たしていたと思われる。針生のように雪城型で注連縄や門松を飾り、中に神棚を作るような集落は針生周辺には見られない。なぜこの集落にしかこのような雪室が見られないのか、今後の課題としたい。

山北町のサイノカミ行事は豊作を祈願して行う行事である。雪室は神を祀る場とされている。その雪室は参拝する場となっており、男性のシンボルを御神体とし、火の神、田の神として祀っている。山北町の雪室も神を祀る場、参拝する場となっている。

新水の雪室は人が入れるものではなく、神を安置する場として利用されている。中には二体の御神体が祀られ、燈明も灯されている。このような事例は新水の他にも、川西町、長野県小谷村でも同様の雪室が見られた。両地域は新水と違って現在では神を安置する雪室は作られていないが、かつては御神体を祀る場所として利用されていた。

これまで集落ごとの雪室の特色を見てきたが、それらを踏まえてさらにサイノカミ行事以外に作られる雪室と比較してサイノカミ行事における雪室の特色を示したい。

雪室はサイノカミ行事に作製される以外に鳥追い行事や狩猟、子供が遊ぶ時に作られる。名称であるが、「ドウ」などの共通する名称もあるが、その行事特有の名称も存在する。サイノカミでは行事名に関係する「センドウ」と呼ばれ、鳥追い行事では「鳥追い小屋」、狩猟では「トヤ」⁽⁵⁰⁾など、それぞれに特有の名称を持っている。形に関しては、サイノカミ行事は雪穴型が圧倒的に多く、鳥追い行事では小屋型が多い。それは利用方法に関連する。サイノカミ行事の時に作製される雪室は鳥追い行事のように、中で火を焚いて飲食をする場ではなく、神を祀る場、参拝する場であったため、通気性の良い小屋型でなくても良かったのである。雪室の利用方法については、鳥追い行事では籠り小屋として、あるいは鳥追い歌を歌う場所として作られている。狩猟時に設営される雪室は、狩猟時に獲物から隠れるための場として、あるいは狩猟時の泊まり小屋として設営されていた。一方、サイノカミ行事の時に作製される雪室の特色は、雪室の中に神を安置し、参拝するという宮のよ

うな役割を持っていたことである。それは狩猟や鳥追い行事の中で作られる雪室にはあまり見られない特色であり、そのことがサイノカミ行事の中で作製される雪室の存在意義であったのであろう。サイノカミ行事の雪室は、神を祀る神聖な場であったからこそ、今日まで作製続けられてきたのである。

五、おわりに

本稿では、これまでサイノカミ行事の中で作製されてきた雪室の研究がほとんどなかったため、雪室の変遷とその要因、さらに雪室の特色の解明に力を注いできた。まず、雪室を中心に調査した結果、五カ所の事例を報告した。また、報告はされていたが、これまで雪室研究上で注目されてこなかった三カ所の事例も取上げた。サイノカミ行事の中で作られる雪室は、現時点で最古の文献が残されている江戸時代から現在まで辿ると変化が見られた。江戸時代では武士が男子の祝儀を目的とするサイノカミ行事の中で、雪室を作っていた。雪室には神の依り代とされる飾り物とし、神を迎える場とされていた。それが、明治に入ると武士社会が崩壊し、武士のサイノカミ行事と雪室がなくなり、

集落単位で行うサイノカミ行事だけが残った。そのサイノカミ行事の中で作製される雪室や行事は集落境を意識したものであった。特に境の神であるサイノカミを中心とした行事であり、雪室の中にもサイノカミの御神体を祀っていた。また、集落を二分し、上と下それぞれ、雪室を作るという双分制をとっている集落も存在した。戦後になると雪室やサイノカミ行事は境を意識することはなくなった。境の神であるサイノカミが御幣に変わったり、上と下で別々に作っていた雪室が一カ所でまとめて作られたりするようになった。その変化の理由は、交通の発達により、境の意識が薄れたこと、また基幹産業であった農業が減少し、一緒に労働する機会が減り、集落の共同体の意識が低くなり、他の集落に対する対抗意識がなくなったことが挙げられる。そして、現在では年中行事の中で行うもの他に、新たに雪まつりの時にサイノカミが行われ、雪室が作られ、集落以外の人も参加できるようになり、見せるものへと変化していった。それは観光事業が発展し、年中行事も観光化されるようになり、雪室もサイノカミ行事もその影響を受けた。このような状況の中で、雪室やサイノカミの形が生じたのである。

雪室は環境によって大きく変化を遂げてきたが、変わらない点もある。それは、雪室の中に神を安置し、参拝する場として、雪室は宮のような役割を果たしていたことである。これは、サイノカミ行事の中で作製される雪室が持つ特色である。雪室の中に神を安置する。つまり、雪室は神聖な場とされていたため、早い時期にほとんど消滅してしまつた鳥追い行事の中で作製される雪室や狩猟時に設営する雪室に比べて、現在まで受け継がれてきたといえよう。神を雪室の中に祀ることが、サイノカミ行事の中で作製される雪室の意義であつたという結論に至つた。

変遷と地域性の要因を明らかにするために、サイノカミ行事に作製される雪室を対象として研究を進めてきた。本稿ではその中でも変遷とその要因、雪室の特色の解明を試みたが、サイノカミ行事の雪室にも地域性が見られる。山形県の雪室は人が入れる大きさで、中に入って神を参拝できるよつになつてゐる。福島県では雪室の中に神棚はあつてもその中に御神体が祀られることはない。なぜ、このような地域性が表れるのか、その要因の解明を課題としたい。今後雪室の変遷と地域性の要因の解明に力を注ぎ、文化と環境の関連性について明らかにしていきたい。そのため

には、サイノカミの雪室だけではなく、様々な雪室を対象とし、またその雪室が作られてきた環境についても調査し、研究していくべきであろう。

注

(1) カマクラは時代や地域によって意味が異なる。江戸時代では小正月行事の総称を示す用語として使われていた。明治になるとカマクラは雪室のことを示すようになる。だが、角館では火振りのカマクラと呼び、六郷では竹打ちをカマクラと呼んでいる。現在でもカマクラを行事名としてゐる地域も存在する。

(2) 雪室とは、雪山に穴を開けて中に人が入れるものや、雪で囲みを作り、上に木を渡し、筵などで屋根をかけたもの、雪で作つた櫓のようなものを言う。地域によつて名称が異なり、雪穴やカマクラ、鳥追い小屋などの名称がある〔拙稿「江戸時代後期の雪室——長岡と塩沢の雪室を中心として——」『昭和女子大学文化史研究』九、二〇〇五年、五一頁〕。

(3) ブルーノ・タウト、篠田英雄訳『日本美の再発見』岩波書店、一九三六年、一〇四—一〇八頁。

(4) 例えば、福島県奥会津地方では雪まつりの時にカマクラと呼ばれる雪穴型の雪室を作っている。

(5) 例えば、栃木県栗山村湯西川では、毎年二月に温泉を訪れる

人々に楽しんでもらうために、一カ月間かまくら祭りを開催している。

- (6) 雪国のかまくら作りを自宅で体験してもらおうと、秋田県横手市観光協会が地元の雪を詰めた「ミニかまくらセット」をインターネットを通じて販売した〔読売新聞夕刊 二〇〇一年一月十四日〕

- (7) 奈良環之助「カマクラの語源について」『出羽路』一一、一九六一年、四〇—四二頁。

- (8) 佐川良視「鎌倉の発祥と語源」『横手郷土史資料』二六、一九五四年、一一—一〇頁。

- (9) 従来の研究はカマクラ語源に重点を置いていたなか、渡辺富美雄・松沢秀介・原田滋『新潟県における鳥追い歌—その言語地理学—』は新潟県中越地方の雪室の資料を報告した貴重な研究である。雪室の事例報告をするともに、形も分類している。また雪室の形と地域との関連性を示していることは今後地域性の解明に繋がる可能性がある〔渡辺富美雄・松沢秀介・原田滋『新潟県における鳥追い歌—その言語地理学—』、野島出版、一九七四年、一一三—一二四頁〕。

- (10) 福田アジオ他編『日本民俗大辞典』上巻、吉川弘文館、一九九九年、六八八頁。

- (11) 神野善治『人形道祖神—境界神の原像』白水社、一九九六年。

- (12) 石田哲弥『道祖神信仰史の研究』名著出版、二〇〇一年。

- (13) 平田町、朝日村、田島町にはサイノカミの雪室についてごく一部だが、報告されている。平田町は、佐藤春吉『振りかえつてふる里—わがまち平田—』ぎょうせい、一九九二年、二四—二六頁に書かれている。田島町は、田島町史編纂委員会編『田島町史』一九八九年、二〇—二〇五頁に報告されている。朝日村については明治時代のサイノカミ行事と雪室が記してあるため、後述する。

- (14) 話者は三瓶敏武氏（昭和八年生）である。

- (15) 話者は久保田俊作氏（大正十二年生）である。

- (16) 回答者は木村長三郎氏（昭和八年生）である。

- (17) 話者は湯田与作氏（大正八年生）である。

- (18) 大天狗と烏天狗の面は星武氏宅に保管されている。

- (19) 本稿の調査記録は平成十三年二月十一日による報告である。

- 話者は佐藤春吉氏（大正十五年生）

- (20) この歌詞は「本体 本体 塞の神の きんまらは 一尺八寸 三つ伏せ 中どんと くびれて 先は疑宝珠 山形の子供は 意地の悪い 子供で はねる木を 切ってきて 父の性器 焼いてしまった」という意味である。

- (21) 木を四本立て、注連縄を張り、正方形の形を作る。それを田に見立てて、藁束を稲として子供が田植の真似事をする。

- (22) 本来は二十日に行う行事である。願い事をして、灸を頭や肩にのせる。

- (23) 話者は渡辺庄一氏（昭和九年生）である。
- (24) ジャンケンの方法は、「いっぽんのかつどん」といってだすか、もしくは「うん（グー）」とだしたか」「パラレ（パー）」とだしたか」「チョツケレ（チョキ）」とだしたか」と言って相手がその言ったものを出したら負けという二通りの方法があった。
- (25) 道を作る時に「ぎっちば ぎっちば 助けえんじ（爺）窓のしたの赤めえけぢ みじなの皮きた 庄八ぢ」と歌いながら雪を踏んだ。この歌に出てくる者は、昔の人で、特徴のあったお爺さんの名をとったものである。
- (26) 渡部留治、戸川安章「大綱のサイの神行事」『庄内民俗』一四、一九四九年、一二〇—一二二頁。
- (27) 立川町教育委員会編『町の文化財 総集編』一九九〇年、二五二—二五四頁。
- (28) 戸川安章『日本の民俗 山形』第一法規、一九九〇年、二三七—二三八頁。
- (29) 温海町史編さん委員会『温海町の民俗』一九八八年、一二七頁。
- (30) 前掲（26）
- (31) 渡部留治『朝日村誌（二） 神社は語る上』九二、朝日文庫、一九六五年、一九—二三頁。
- (32) 前掲（26）一二〇頁。
- (33) 前掲（31）二〇頁。
- (34) 前掲（26）一二〇—一二二頁。
- (35) 岩田慶治『砺波地方における双分組織』大阪市立大学地理学教室編『日本の村落と都市』ミネルヴァ書房、一九六九、二〇二頁。
- (36) 前掲（35）二〇二—二二二頁。北原真智子は従来の双分制研究についてまとめている（北原真智子「日本における双分制—特に祭を中心として—」二二—四、一九五七年、八七—八九頁）。
- (37) 前掲（36）八七—八八頁。
- (38) 前掲（36）北原は外婚制の他に日本では祭りなどにも双分制が見られることを指摘している。八九頁。
- (39) 編者は秋田藩の儒臣那珂長左衛門道博である。これは幕府の儒官である屋代弘賢の提唱による問状に対しての答として那珂が作成した報告書である。
- (40) これは萩津勝考が幕末頃描いたものである。江戸時代後期の久保田城下と近郷の風景、風俗などが十一場面に分けて描かれている。
- (41) 小泉氏計の著作である。この『北越月令』は嘉永二（一八四九）年に書かれた。
- (42) 幕府の儒官である屋代弘賢の提唱による問状に対しての答として小泉氏計が作成した報告書である。
- (43) 現在、火振りには秋田県角館町や中仙町で行われている。

(44) 前掲 (31) 二一—二二頁。

(45) 前掲 (29)

(46) 前掲 (27)

(47) 前掲 (28)

(48) 久保田の雪室の飾りは繭玉、旗、ホタキ棒、俵である。

(49) 『北越雪譜』は、鈴木牧之が幕末頃に記した雪国越後塩沢の民俗誌である。この資料に記された雪室の飾り物は竹や注連縄である。

(50) トヤという雪室の名称はトヤ待ちからとったものである。トヤ待ちとは山鳥などの獲物が止まる木の近くに小屋を作り、そこから鉄砲で射撃する方法である〔拙稿「狩猟の雪室の二類型——福島県只見川流域と野尻川流域を事例として——』昭和女子大学生活機構研究科紀要』一五、二〇〇六年、五三頁〕。

〔付記〕

本稿は昭和女子大学渡辺伸夫先生、田畑久夫先生のご指導のもとに作成致しました。また、後藤淑先生、大谷津早苗先生にご教示を賜りました。さらに、資料収集にあたり、多くの方々にお世話になりました。厚く御礼申しあげます。

秋田県立博物館、秋田県立文書館、金山町教育委員会（五ノ井忠道氏）、田島町教育委員会（澤田けい子氏）、致道博物館（犬塚幹二氏）十日町市博物館（阿部恭平氏）、十日町情報館（水落久夫

氏）、雪の里情報館（大友義助氏）

木村長三郎氏、久保田俊作氏、佐藤春吉氏、関谷好美氏、高橋勝氏、三瓶敏武氏、森田和陽氏、湯田与作氏、渡辺英里子氏